

なんくのふしぎなたま

奄美市立屋仁小学校 一年 てらだ ゆづき

「ああ、きょうもひとりぼっちか。」

と、なんくは、さみしそうにちいさなこえでつぶやきました。

なんくは、やにのもりのおくのおうちにひとりですんでいます。なんくは、きょうもまどのそとをぼんやりとながめていました。

なんくは、はぶのおとこのこです。はぶなので、みんなからとつてもこわがられています。なんくのからだのしっぽのさきには、ほかのはぶにはない、あかい色のまいたまがついています。なんくにはどうしてまいたまがついているのかは、わかりません。いつからついているのかも、なんくには、わかりません。そのまいたまは、よるになると、いつもぴかぴかときみわるくひかります。

「どうしてぼくだけこんなまいたまがついているのかな。きつとこのまいたまのせいで、ともだちができません。」

と、なんくは、しっぽのさきのあかいたまをみるたびに、かなしくつぶやきました。

あるひのこと、なんくは、「よるになるとあかくひかるんだから、きょうは、おひるにそとにあそびにいったみよう。」とけっしんして、はりきつていえをでました。おひるにそとにでるなんて、はじめてのことです。

「おひさまのひかりって、こんなにあかるいんだ。」なんくは、まぶしくておもわず目をぎゅつとつよくとじてしまいました。それから、もういちどゆっくりめをあけて、ゆっくりとうごきはじめました。でも、どうろがふらいばんみたいにあつくて、すぐにちかくのきのうえにのぼってしまいました。

「ああ、おひるってこんなにあついか。どうろをあるくと、おなかがやけてしまいそうだ。」

と、なんくは、あつくなつたおなかをさすりながらひとごとをいいました。それから、どうろとははんたいのきのうえをめざして、ゆっくりとのぼっていききました。きのうえからみるおひるのもりは、いつもよるにみているけしきとは、おおちがいです。いちばんたかいところからは、やにのうみがみえました。やにのうみは、きらきらひかって、とてもうつくしくみえました。なんくは、そのうみにはいつてみたくなりました。なんくは、するするときのうえからおりと、やにのうみにむかうことにしました。

「やつぱりどうろは、あつい。おなかがやけそうだ。で

も、うみでおよぎたい。」

と、なんくは、またひとりごとをいいながら、おなががあついのをぐつとがまんして、うみをめざしてによるよとあるいていきました。によるによるあるきは、はやくありません。じかんがかりました。

やつとのおもいでうみにつくと、なんくは、ぼちゃんとはとびこみました。

「ああ、つめたくてきもちいい。さっきのおなかのあつさがどこかにいってしまった。」

なんくは、うれしくなつてうみのなかをじゆうにうごきまわりました。まるで、さかなのように。

あつというまに、たのしいじかんはすぎて、おひさまがうみにしずもうとしています。なんくは、

「もう、ゆうがたか……。」

と、おどろいていそいでいえへかえりました。たくさんあるいて、たくさんおよいで、すっかりつかれたなんくは、いえについたとたん、ぐうぐうとねてしまいました。ふとぎがつくと、まわりは、まっくらです。もうよるです。

「あれ、きょうは、あかいたまがひかっついていないよ。」

「からだのちようしがわるいのかな。」

と、まどのそとからだれかのはなしごえがきこえてきました。なんくは、「えつ、ぼくのことをはなしているの

かな。」と、びつくりして、しばらくはなしをきくことにしました。

「だいじようぶかな。」

「ちよつとこえをかけてみようか。」

と、いままできいたことがない、やさしいことばがきこえます。なんくは、うれしくてたまりません。ぱつととびおきるとどあをあげてそとへとびだしました。

そのときです。なんくのあかいたまがいつものぶきみないろではなく、ぴかんとやさしくにじいろにひかりました。

「なんだ、あのあかりは。」

「うわあ、きれいだね。」

みんなは、なんくがこわいはぶだということをおすれてまわりにあつまつてきました。なんくは、うれしくてうたをうたいはじめました。そのうたごえは、みんなをやさしいきもちにしてくれる、すてきなこえです。みんないつのまにか、おおきなわになっていました。みんなにこにこえがおです。なんくのかおもえがおでいっぱいです。なんくのしつぽのにじいろのひかりは、いつまでもいつまでもみんなをやさしくてらしていました。なんくは、もうひとりぼっちではありません。

【評】なんくのたまが出したにじいろの光で、みんなの心がやさしくなれましたね。たまのいろや、なんくがやにのうみに入るところなどこまかくえがかれていて、ようすがとてもわかりやすいさくひんでした。

(屋仁小 教諭 渋谷 めぐみ)